みやぎの郷土資料集

1	「若き日の晩翠」	土井　晩翠
2	「青年三之助」	鎌田　三之助
3	「北上川と川村孫兵衛重吉」	川村孫兵衛重吉
4	「ひとすじの道」	落合　直文
5	「鉄の神様　その少年時代」	本多光太郎
6	「理想に生きる」	林　子平
7	「俊斎と長英」	大槻　俊斎
8	「一日も休まない図書館」	星　泰三郎
9	「堤人形の目にひかれて」	芳賀佐五郎
10	「ひびけ歌声　東北の地に」	福井　文彦

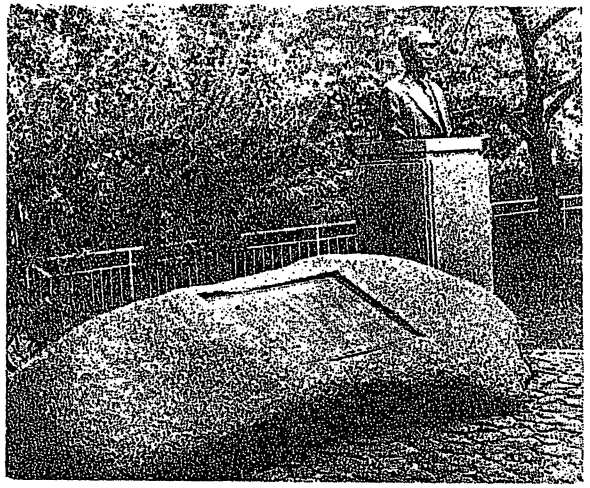
※昭和61年3月31日「宮城県教育委員会発行」

○活用方法　・先人の業績，伝統文化の尊重，地域の生き方についての学びに係る資料として活用できます。
・ダウンロードし児童生徒数印刷して活用ください。
・資料1～資料7は主として中学校，資料8～資料10は主として小学校高学年向けとなっていますが，学校の実態と計画に応じて活用ください。

若き日の晩翠

春高楼の花の宴
めぐる盃影さして
千代の松が枝わけ出でし
むかしの光いまいずこ

仙台市街を眼下に見下ろす青葉城址にある碑に、郷土が生んだ詩人、土井晩翠の名作「荒城の月」が刻まれている。



青葉城址の「荒城の月」詩碑

この詩は一八九八年（明治三十一年）、上野の東京音楽学校（現在の東京芸術大学）から頼まれて作られたものであるが、滝廉太郎の作曲により、明治、大正、昭和の時代を超え、老若男女すべての人々に歌いつがれている。

晩翠は、仙台市北鍛冶町に質商を営む、土井七郎兵衛の長男として生まれ、名を林吉といった。

一八八四年（明治十七年）、十四歳で高等小学校を卒業した林吉は、中学校への進学を熱心に望んだ。しかし、父は祖父から、

「林吉は学問が好きなようだが、商いをするには学問はいらない。中学などにやってはいけない。」

と言いわたされた。父は息子を案じながら、

「でも、おじいさんやおばあさんは、林吉に幼い時から、学問のためになるいろんな話を聞かせておったじゃないですか。」

と反論する。

「いや、あれは私たちが好きだったから、つい孫に聞かせてやったまでだ。」

「しかし、林吉は中学校進学を真剣に考えているようですよ。」
「いや、それはならん。商人が学問などにうつつをぬかしておったら、ろくな者にならん。」
祖父の言いつけに背くことのできない父に説き伏せられ、林吉はいやいやながら、家業の質屋の店先で、見習い小僧として働く身になった。
毎日、お客を相手にしたり、品物を倉に出し入れなどしている林吉の懐からのぞいているものは、その当時、発刊されたばかりの「新体詩抄」であった。

山々かすみいりあいの
鐘はなりつつ野の牛は
しずかに歩み帰り行く

耕す人もうちつかれ

ようやく去りてわれひとり
たそがれどきに残りけり

彼はこのような新しい形のみずみずしい詩に瞳を輝かし、未来に夢を抱きながら、夢中になって口ずさんでいた。
それから二、三年たって、国分町に仙台英学塾が開かれた。その開校の話を聞いた林吉は、行きたくて行きたくてたまらなくなった。
（おれはどうしても商人には向かない。自分の好きな学問を勉強して、この道で身を立てよう。）

土井晩翠

祖父の気持ちをくんだ父の方針に、いったん従いはしたものの、林吉には、胸に燃える学問への火をとうてい消すことができなくなっていた。
（今度こそは、ぜひこの塾に入ろう）と決意した林吉は、ある夜、思い切って、祖父と父が居合わ

せる茶の間に正座した。

「私は、どうしても英学塾で勉強したいんです。店の手伝いもしますから、ぜひ塾に通わせてください。」

祖父はふきげんな顔をしながら言った。

「お前が後継ぎをしなかったら、この店はいったいどうなるんだ。」

林吉は、なんとか承知させねばと、必死になった。

「おじいさんやお父さんが丈夫なうちは、自分の好きな道へ進んで勉強してもいいじゃありませんか。」

しばらく沈黙が続いた。やがて父は大きくうなずくと口を開いた。

「仕方がない。お前が進む道をお前が決めるのなら、止むを得まい。」

祖父も親子の気持ちを察して、

「よかろう。ただし、中途半端な思い上がりではないだろうな、それから、できるだけ店の手伝いもしてくれ。」

と進学を承知した。

喜びいさんで通学し始めた林吉は、教科書に出てくる西欧の英雄論に心をうばわれ、また、その頃「自由の灯」という新聞に連載された、ビクトル・ユーゴーの伝記などに深い感動を受け、夜中まで机の前に座ることがしばしばであった。

やがて、仙台にできた第二高等中学校（現在の東北大学）に、十八歳で入学を許された林吉は、学問への情熱をますます燃やし、大きく羽ばたいていった。

英文学者としての晩翠は、明治という夜明けの時代にあって、島崎藤村と肩を並べ、新しい詩の運動に力を注ぎ、「新体詩」と呼ばれる詩の確立に大きな功績を残した。

晩翠は一九五〇年（昭和二十五年）、仙台の名誉市民に推され、翌年には文化勲章を受章し、終生を仙台市民として過ごした。

青年　三之助

この話は、品井沼干拓の大事業を成し遂げた鎌田三之助翁の、若き日のエピソードである。

翁が二十五歳のとき、鹿島台の農民たちと産米を馬に積んで、六里（二十余キロメートル）の道を石巻まで売りにいったときのことである。

石巻は、北上川河口にあり、昔から県北地方の産米を一手に集積し、江戸方面に船で送り出す港町として栄えていた。そのために、仕事を求めて多くの人々が各地から集まって来た。その中には、荒い言動で町の人々に迷惑をかける者も少なくなかった。

このような港町の様子は、江戸、明治、大正、昭和へと続いたようである。

さて、三之助一行が石巻の米問屋街に入って行くと、十数軒もある問屋の出入口から、米さし（竹やりのような鉄の管）を手にした雇人衆がぞろぞろと道路に出て来た。そして、かたっぱしから馬上の米俵にさしを突き入れて米を抜き出し、質を確かめてから自分の店に連れ込もうとした。

三之助がさらに驚いたのは、ここで抜き出された米はもとの俵には返されず、雇人たちの物になってしまい、問屋との売買のとき、減量分が差し引かれてしまうことであった。

さし一本に入る米の量は少ないものだが、俵にさし込まれるのは一度や二度ではない。大勢の雇人が、てんでにさしを振るってぐさぐさとやり、それも、一日に何百俵、何千俵も手がけるのだから、抜き取られる米の量は大きいものになった。

雇人たちは、昔からこのようにするのが当然のことであると思っていたし、米を売る農民たちも仕方がないものとあきらめ、あえて不平を言う者もなかった。

このような事情を全く知らなかった三之助は、ちょうど東京での勉学を終えて家に帰っていたので、父に言いつけられ、村人たちと一緒に出かけて来て初めてこの不正横暴なありさまを目にしたのである。

血気盛りで人一倍正義感の強い三之助が、どうしてこれを見過ごそう。

「おまえたちはその米をどうするのだ。」

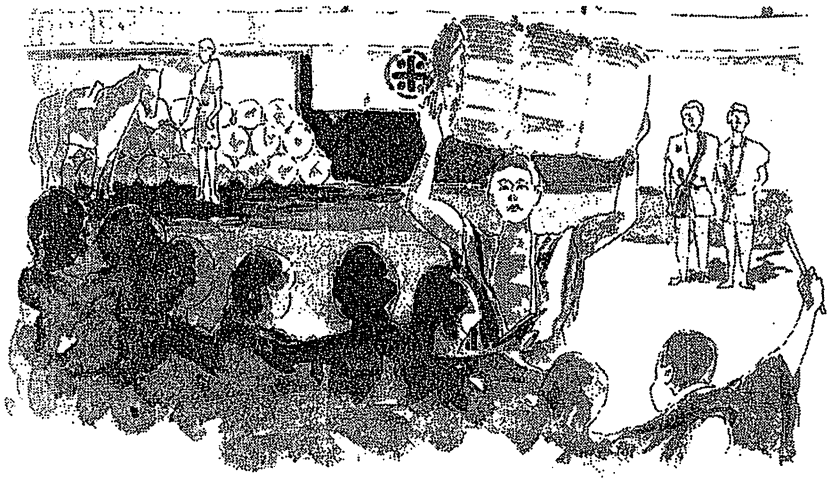
と、いきどおりを顔面に表してつめ寄った。すると、雇人衆の中から一人の大男が三之助の前に進み出て、

「どうするもこうするもあるものか。昔からこれはこっちの物と相場が決まっているんだ。しみったれたことを言うな。」

とかみつくようにどなった。だが、それを恐れて引っ込む三之助ではない。

「ばかなことを言ってはいけない。おれたちが汗水流して作った米を、むざむざただ取りされてたまるものか。さあ、抜き取った米を皆返せ。」

「なにを若造めが、生意気なことをぬかすと、おまえの米を買ってやらねぞ。」



「買ってくれなくていい。このような不正をする者には、頼まれたって売るものか。米をもとどおりに俵の中に返せ。」

「返さねと言ったらどうするのだ、やい、この青二歳。」

大男がこぶしを固めて三之助に迫ると、十数人もの仲間が多勢をたのんでぐるりと三之助を取り囲んだ。

「やっちめい。生意気なやろうだ。」

「鎌田のせがれもなにもあるもんか。打ちのめしてしまえ。」

と、口々にののしりながら、さしを振るって打ちかかってきた。

同行の村人たちは、あまりの恐ろしさに胆を冷やしてうろうろするばかりであった。

三之助は急に身をひるがえし、さっと囲みの中から飛びだし、自分の馬に積んであった米俵を一度に二俵、両手に一俵ずつひっさげて、もとの場所に戻ってきた。（米一俵の重さは約六〇キログラム）

ドッシリと米俵を地面に下ろし、その一俵をいとも軽々と頭上高く持ち上げ、雇人衆をにらみつけながら、

「八十八度の手塩にかけた百姓の命米。欲しけりゃこれを受け取ってみよ。」

と大音声をあげ、右に左に、のっしのっしと歩きだした。

この様子に勇気づけられた村人たちは、三之助の周りに駆け寄り、守りの形をとった。相手を飲み込むような、たくましい気はくと、村人たちの鋭い目なざしに、さすがの連中も度肝を抜かれ、たじたじと囲みを乱していった。

騒ぎを聞きつけた問屋の主人たちがこの場に駆けつけ、三之助一行と雇人連中の間に入り、深々と頭を下げながら雇人たちの非をわびた。

雇人たちも、一人また一人と、次から次に抜き取った米を恐る恐る三之助たちの前に差し出した。

このようなことがあってから、この地でのさし米抜き取りの悪風は、全く無くなったとのことである。

北上川と川村孫兵衛重吉

こがね花咲くとよみ奉りたる金花山海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひてかまどの煙立ちつづけたり。（奥の細道）

松尾芭蕉が石巻を訪れたのは、一六八九年（元禄二年）の五月であった。当時、石巻は東回り航路有数の港町として栄えていたが、とりわけ米の積出港としてにぎわっていた。仙台領内はもちろん、北上川を舟で運ばれた南部（盛岡）藩の米も、この石巻から江戸に送られていたのである。

だが、芭蕉の来る六十年ぐらい前の石巻は、どこにも見られる小さな漁村にすぎなかった。千石船の出入りする港となったのは、伊達政宗が川村孫兵衛重吉に命じた北上川下流の改修工事の後であった。

北上川河口

川村孫兵衛重吉は、もとは長州藩毛利氏の家臣である。いまの山口県萩の人だったが、藩主が関が原の合戦で大阪方についたため、重吉は国を出て近江（滋賀県）の蒲生に住んでいた。

この蒲生は後に政宗の領地となり、一六〇一年（慶長六年）、京都に上る途中の政宗は初めてこの地に立ち寄った。

宿舎に入ったときは夜もふけていたが、政宗は使いを走らせて重吉を召し出した。若くして数学や土木の学問にすぐれていた重吉の才能は、早くから政宗の耳に入っていたのである。

重吉を前にした政宗は、静かな口調で語りかけた。

「重吉よ。戦国の世もこのたびの合戦でようやく

終わりとなった。ついては一日も早く領民のくらしの立て直しをはかりたい。

そのためにはまず新田を開いて米の増産を急ぎたいが、わが藩には水利や土木に明るい家臣が少なくて困っている。重吉はその方の学問を身につけながら、このまま蒲生の地にうずもれる覚悟と聞く。だが、それではせっかくの学問は生かされないであろう。学問はひとりの人間のためにあるものではなく、世のために広く用いられてこそ真の学問というものである。わしは乱世に疲れた領民のために、重吉の学問をぜひ生かしてもらいたいと思うのだがどうだろう。」

政宗の言葉には、領民の豊かなくらしを願う藩主の気持ちがあふれていた。だが、それにもまして二十五歳の重吉を感動させたものは、初対面の自分に寄せる政宗の信頼と期待の大きいことであった。

「私の家は、代々長州藩の普請奉行でございました。武士の家柄とはいいながら学問をもって主君に仕えていたのでございます。しかし、このたびの合戦で私は世を捨て、もはや再び世に出る気持ちはございませんでした。ところがただいまの殿のお言葉で、私の身はどうあろうと、学問はやはり生かさねばならないということを教えられました。殿のご期待にこたえられるかどうかは心配ですが、私は喜んで殿のおともをいたしましょう。」

大きくうなずく政宗の前に、重吉は紅潮した面を上げてきっぱりと言った。学問上の親友である山崎平太左衛門の同行を許されたことも、重吉にとっては大きな喜びであった。

ふたりは家族をともなって仙台に移り住んだ。蒲生の一夜の誓いどおり、重吉は今に残る大工事を次々と手がけたが、なかには鉱山や製塩の事業まであったという。

しかし、重吉の生涯をかけた大事業といえば、何といっても元和年間（一六一五年ごろ）の北上川改修事業であった。たまたま藩の財政が苦しいこともあって、実現をあやぶむ重臣たちはこぞって着工に反対した。重吉の才能を信頼する政宗の決断がなかったら、芭蕉の見た石巻のにぎわいはなかったはずであ

る。

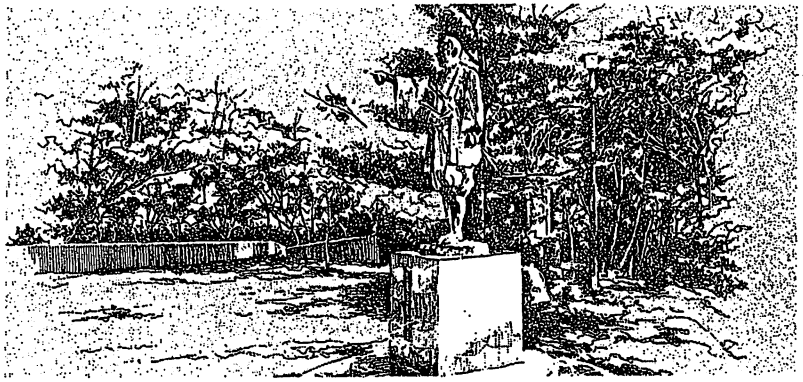
一連の事業で最も難関とみられたのは、北上川を下流で二分し、石巻に流す新しい河道を掘ることであった。石巻を河口港とするための工事である。

なにぶん、測量にしても人が縄を引いて距離を測る時代であった。そのためにはまず樹木を切り倒し、往来の道をつけることから始めねばならなかった。

夜はたいまつを持った人夫を並べて土地の高低を調べたり、点々とかがり火を燃やして河道の曲がりぐあいを決めるなどの工夫もあったが、作業はすべて人の手足を頼りにするほかはなかったのであった。

重吉の一家はすでに石巻に移り住んでいたが、一六二三年（元和九年）にこの河道工事が始まると、重吉はほとんど働く人夫たちと寝食を共にした。工事にかけた重吉の気持ちがよく分かる。

驚くことは、この大工事が、着工後わずかに四年の歳月で完成していることである。現代の技術水準からみても信じられないほどの早さだが、重吉の才能



重吉の銅像スケッチ

もさることながら、働く人たちと苦楽を分け合う彼の人がらに負うところもあったと思われる。

重吉はこうして計画したすべての事業を完成したが、仙台の城下に再び帰ることはなかった。彼は石巻にとどまったまま、最後の事業となった北上川河口に近い家で七十四歳の生涯を終わっている。政宗の期待と信頼に面を紅潮させた蒲生の一夜から、もはや五十年近い歳月が流れていた。

先年、河道工事を指図する重吉の銅像が、芭蕉ゆかりの日和山に建てられた。重吉の指さすま下には今も変わらぬ豊かな水をたたえて、北上川がゆったりと流れている。

ひとすじの道

落合直文

「与謝野君。すまんがわしの言うことを代筆してくれないか。どうしたことか、きょうは筆を取る力がでてこないのだ。」

落合直文の枕もとには、午後のあわい光が静かに差しこんでいた。一九〇三年（明治三十六年）の晩秋、師の病いが重くなったことを聞いた与謝野鉄幹は、この日も朝早くから直文の枕もとに座っていたのである。

落合直文は、一八六一年（文久元年）、仙台藩家老鮎貝盛房の次男として、今の気仙沼市松岩に生まれた。後に仙台の国学者落合直亮の養子となり、以後国文学ひとすじの道を歩んで来たのである。

今は筆を持つ力さえなくなった直文だが、それでも声には張りがあった。鉄幹は急いですずり箱のふたを取ると、

「さあ、先生。何なりとおっしゃってください。筆の用意はとうにできております。」

と、直文の枕もとに座り直した。

我が歌を書きてと人に乞ふばかり病重くもなりにけるかも

書き終えた鉄幹の目から、大粒の涙がとめどもなくこぼれていた。今は名高い歌人の鉄幹だが、勉学中の若い彼は貧しかった。見かねた直文は何度も彼を自分の家に連れて行き、食事はもちろん、着るものまで与えていた。それらのことがきのうのことのように思い出され、鉄幹は筆を置くことさえ忘れていたのである。

だが、ふたりの間がらは、師弟というよりも、むしろ直文の新しい感覚の和歌を世に広めた同志として知られている。

和歌はわが国の伝統的な文学のひとつだが、そのため古い形や考えにこだわり過ぎ、だれにも親しめる文学とは言えなかった。このままでは和歌はますます一般の人から見放されることを心配した直文は、一八九三年（明治二十六年）二月、和歌を新しい感覚で見直そうという考えを世に広めることになった。

直文の考えは鉄幹をはじめ、直文の弟である鮎貝槐園（あゆかいかいえん）や尾上柴舟（おのえさいしゅう）などの和歌を通し、たちまち全国に広まった。和歌は今では一般に短歌とよばれるが、新聞や雑誌の文芸欄に見る通り、多くの人びとに愛好されていることがよく分かる。直文のまいた種が、いま見事に実っている、といってもよいだろう。

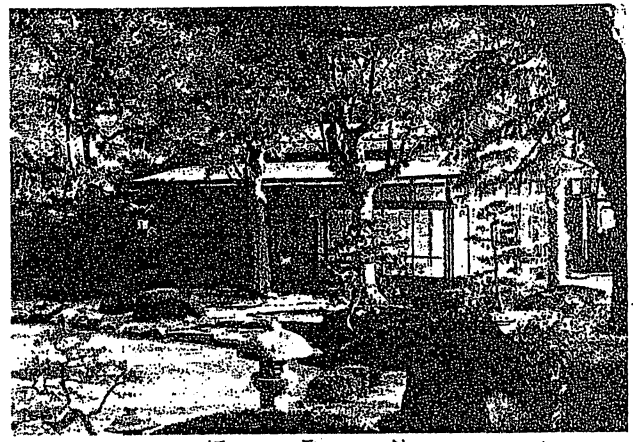
直文は歌人として立派な仕事をしたばかりでなく、学者としても辞書や文法書の編さんを手がけるなど、多くの業績を残している。

当時は、わが国の学校教育の制度がようやく整（ととの）い始め、それにともなって近代的な国語辞書を望む声も高まっていた。だが、国語、国文学の学者が少ないこともあり、その編さんはなかなか実現しなかった。

直文はどうしてもそれを見過（す）ごすことができず、苦心を重ねて「日本文典」を編さんした。これを終えると休む間もなく「日本大辞典ことばの泉」の編さんにとりかかった。明治二十八年から七年をかけて完成したこの辞書は、当時はわが国最高の辞書として多くの人びとに愛用されたという。

このように直文は、ほかの学者が手をつけかねていた困難な仕事を次々と手がけたばかりでなく、文学や歴史の分野でも多くの著作を残している。なかでも親孝行な少女の物語を詩にした「孝女白菊」は、読む人の心を動かして名作の評判が高かった。

一方、直文は一八八九年（明治二十二年）から第一高等中学校（のちの第一高等学校）の教授となり、国文学を志す学生を教えていた。歌人であり学者である直文に、休むいとまは全くなかった。四十三歳の若さで、ついに病魔（ま）に勝


煙　雲　館

てなかったのはそのためであったろう。一八九八年（明治三十一年）の秋には教授もやめ、今はすっかり病み衰えていたのである。

さきほどまで部屋に差しこんでいた日ざしも、いまはもうすっかり尽きようとしていた。いつのまにか吹き出した風に、庭の萩がかさかさと音を立てている。

自分の号を「萩の家」というほどの直文は、ことのほか萩を愛し、家の庭にも植えこんでいた。萩を眺めていると、父と共に過ごした煙雲館の日々が思い出され、疲れた心も休まるのであったろう。

風の音に目を覚ましたのか、軽い咳ばらいをして直文は目を開けた。枕もとには柴舟も座っていた。

しばらく天井を見つめたままだった直文は、再び筆の用意を頼むとゆっくり口を動かした。

詠むままに病も我は忘れけり歌やこの身の命なるらむ

短冊を手にしたまま鉄幹は、思わず柴舟と顔を見合わせた。これほどまでに弱った直文の、いったいどこに作歌の気力がひそんでいたのだろう。歌を詠みつづける限り、病気など忘れてしまうという直文にとって、和歌は永遠の命であったのである。

直文はこの日から間もない一九〇三年（明治三十六年）十二月十六日、鉄幹や柴舟をはじめ、多くの門人たちにみとられながらその生涯を終わっている。

鉄の神様――その少年時代――

東北大学金属材料研究所を創設し、「鉄の神様」として世界にその名をとどろかした本多光太郎は、一八七〇年（明治三年）、愛知県矢作町で、農家の三男として生まれた。

高等小学校を卒業した光太郎は、父の遺言に従って、三年ばかり村の用水工事に汗を流した。かたわら、夜間、家から徒歩で二十分ほどの寺田塾に通い、地理や英語の勉強をつづけた。昼の勤労と夜の塾通いの中で、光太郎はもの思いにふける日々が続いた。

ある夜、彼は思い切って長兄寛三郎に胸の中をうち明けた。

「兄さんお願いがある。わしを東京に出してくれんかなあ。やぶから棒である。

「なに、東京、そりゃまたえらいことじゃ。東京に行って何をするんだ。」

「学問がしたい。」

「ふうん、何の学問をするんだ。」

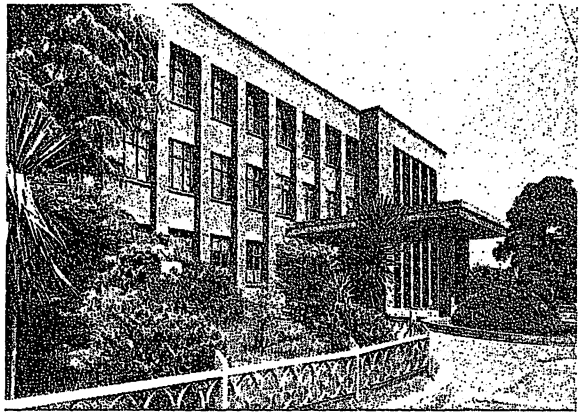
「それはまだ決まっとらん。」

寛三郎は腕を組んだ。かわいそうだと思う心がじんわりわいてきた。しかし、

「そりゃあ困るなあ。浅治郎兄を東京に出して学問させとるだけでも、この家は大ごとじゃ。その上、お前まで、となったら、とてもこの家がもたんな。そりゃ無理じゃ。」

寛三郎はさらにことばを継いだ。

「わしの目から見ちゃあ、お前は学問をやる性じゃないと思うがどうかな。家にはお前も知っての通り金は無いが、お前が耕すくらいの田畑はある。これにしっかり手を入れて、良い田畑にするのがお前の仕事と思うがどうじゃ。」



東北大学金属材料研究所

それ以上は光太郎も言い返すことができなかった。しかし、上京して勉学したい、という彼の気持ちは日増しに強くなっていった。

一八八六年（明治十九年）、桜も過ぎたころのある夜明け、光太郎は自室の机に母と長兄とにあてた置き手紙をして、こっそり家を出た。

納戸（なんど）の戸が風にあおられて大きな音を立てていた。ふと目を覚ました寛三郎は弟の家出を直感し、だれにも声をかけず、暗い土間（どま）で手早く身じたくを整えると、野道をまっしぐらに後を追った。

東海道の松並木のひときわ大きい樹木の下で、光太郎はゆうゆうとにぎり飯をほおばっていた。

「おお、まだこんなところか。」

あまりわけなく追いついたので、寛三郎はついこんなことを言った。胸の中で（怒ってはいけない、怒ってはいけない）とくり返した。光太郎は、兄の顔を見ると表情が変わり、恥ずかしそうにうつむいた。

「おれも腹が減ったぞ、にぎり飯はまだあるんか。」

光太郎はごそごそと包みを開いて、頭ほどのにぎり飯を兄に差し出した。年の十五も違う兄弟二人で、並んでそれをほおばった。

「どうだ、悪いようにはせんから、ここはひとつおれにまかせて家に帰ろう。帰ってからよく相談してみよう。」

しばらくして、光太郎は黙ってうなずいた。涙がほおをつたわった。

「お前は金なんぼ持っとるか。」

光太郎は黙って財布（さいふ）を差し出した。小銭（こぜに）を交えて二円三十銭。寛三郎は胸があつくなった。

「阿呆（あほう）じゃなあお前、こんなことで東京に行けるもんか。」

「二日や三日は水飲んででも歩けるでな。」

そのことがあってから、一年後のある日、次兄の浅治郎から寛三郎に一通の手紙が届いた。

――長いこと実家に負担をかけ、勉学に励みましたところ、このたび東京帝国大学で学ぶかたわら、中学校の英語の講師をすることになり、ようやく生活の見通しがつくようになりました。つきましては、ご承知のように、光太郎が上京して勉強したいとしきりに伝えてきております。この際、私の生活費を割いても弟の志をかなえてやりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

――浅治郎――

こうなると、これまで黙々と働いている光太郎の姿に心を動かされていた寛三郎は、ついに光太郎の上京を許す決心をした。母もこれに同意した。

本　多　光太郎

浅治郎の手紙を見せられた光太郎は、青春の情熱がほとばしる自分を感じていた。

「ぼくは三月ごろには東京に行くぞ！君らも行かんか。」

光太郎はかねてから、上京の志を語っていた親友の安藤と磯貝に事情を告げた。一八八七年（明治二十年）の春浅い三月、竹馬の友三人は、手に手に信玄袋をかついでふるさとを後にした。

本多光太郎は、後に東北大学で研究を続け、K・S磁石鋼の発明という世界的な偉業を成し遂げた。その功績で第一回の文化勲章を受章し、また仙台名誉市民として推されたのである。

理想に生きる

林　子平（仙台市竜雲院蔵）

身ぶるいするような寒い雪の夜であった。うす暗いあんどんの明かりの下で、林子平は一心に原稿の修正をしていた。ひと間だけの住まいは、壁土も半分落ちかけ、二畳だけの台所には、親友の藤塚知明から借りてきたなべや釜が置いてあるだけである。五十歳を迎えた子平は、おいの珍平に身の周りの世話をさせながら、『海国兵談』の著作に打ち込んでいた。

そのとき、頭から雪をかぶり、荷物を背負った栄助がやってきた。彼は仙台の彫工師で、『海国兵談』の版木彫りを請け負っていたのである。雪を払い、なかに入った栄助は、荷物を子平の前に置いた。しかし、なにか元気がなく、いつもと様子が違っている。第一巻の版木の完成を心待ちにしていた子平はひざを乗り出して、

「ほう、できましたか。ありがたい、ありがたい。」

と言いながら、机の上から新しい原稿を取り出した。

「第二巻をお渡しするが、急いでやってくださいよ。いよいよ次からは陸戦の巻に移るが、絵は二枚だけ。第三巻になると……。」

すると栄助は、はやる子平のことばをさえぎるように、

「実は、先生。はなはだ申し上げにくいことでございますが……。わたくしは、これで彫りの方はご免こうむりとうございます。」

栄助の意外なことばに、子平は、ただぼう然と彼の顔を見つめるだけだった。

子平がこの本を書くきっかけとなったのは、二回目の長崎遊学のときであった。オランダ人や蘭学者との交流の中で、しだいに目を世界に開き、欧米諸国の植民地政策や北方の危機を知った。それは大きな衝撃であった。以来、八年

余りで全十六巻の原稿が完成したのであるが、いざ出版となると、貧しい子平にとって大変な事業となった。最初、一千部を目標にしたが、予約の申し込みはわずか三十四名だけで、資金もほとんど集まらなかった。それも無理はなく、この本は幕府の政策を批判する書であり、誰もがしりごみしたのである。また、そのころ奥羽地方は天明の大ききんと伝染病の流行で、仙台藩だけでも三十万人以上の死者が出ていた。そのため、援助するはずの人々も次々と断ってきたのである。

栄助はうつ向きながら、申しわけなさそうに訴えた。

「先生のお仕事をお引き受けすることは大変光栄なことですが、何しろ私の家族は、その日の食うものも口にできない状態でして、代金をいただけるあてもないのでは、とても……。」

子平は、はっとした。これまで、ひたすら学者として学問追究に執念ともいえる努力を傾けてきた。自分にとってこの書は、かつて誰も考えたことのない独自のものであり、これを世に問うことは一生の願いでもあった。そのためには自分はどんなことにでも耐えるつもりでいた。

じっと目を閉じ、沈黙していた子平が引き出しから財布を取り出して、

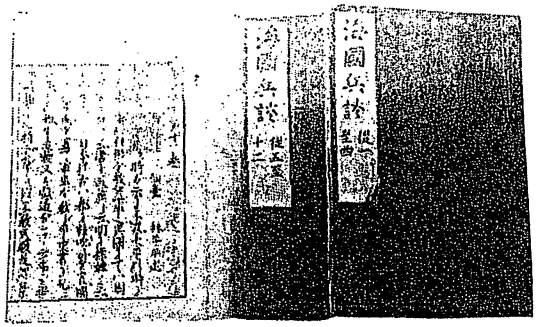
「栄助さん、すまんがわしの有り金はこれだけじゃ。今日のところはこれで勘弁してくだされ。代金は必ず何とかするから、残りはもうしばらく待ってくだされ。このとおりじゃ。」

と、頭を下げた。

「いや、これはいただけません。それじゃ、明日からの先生のお暮らしが。」

と、あわてて断る栄助に、子平はゆっくりと続けた。

「栄助さん、武士も町人も平和な鎖国の中で眠っている間に、日本を取りまく情勢は大きく変わっているんだ。



「海国兵談」（塩竈神社博物館蔵）

南からは、イギリスがインドを足場にオランダと激しく競争し、北の海にはロシアの船がせまっている。また、オランダの商船を調べてみると、大砲を積んで武装している。日本は四方を海に囲まれ、江戸の日本橋から清やオランダまで境なしでつながっている。今こそ海岸を防備しなければ大変なことになる。栄助さん、わしは急がねばならない。これから、自分で版木を彫りたいのだ。すまんが、彫り方を教えてもらえないだろうか。」

いつの間にか、栄助のほおには涙が流れていた。

「先生、お許し下さい。この上はたとえ、妻子もろとも身が骨になろうとも版木を彫らせてもらいます。」

こうして子平は慣れない小刀を持って、自らも版木を彫り、食事を二度に、さらに一度にしてまでも、この本の完成に打ち込んだのである。ついに、一七九一年（寛政三年）、全十六巻ができあがった。このとき子平は五十三歳、実に十三年もの長い年月を要したのである。

そのころ幕府では、老中松平定信が、政治を引き締めるために出版物を厳しく取り締まっていた。子平も何らかの圧迫は予想していたが、それに屈することなく、何とか初版三十八部を発行したのである。しかし、その年の暮れ、突然江戸に呼ばれて厳しい処分を受けた。根拠のない考え方で幕府を批判し、出版手続きに違反したという理由で、一切の活動を禁止され、仙台の兄の家で謹慎生活をしいられたのである。翌年の五月には、生涯をかけてつくった書物と版木も取り上げられてしまった。

林子平の墓（仙台市竜雲院）

子平は、そこで自らを六無斎と称し、

親も無し　妻無し子無し　版木無し
かねも無ければ　死にたくも無し

と歌い、一七九三年、無念のまま生涯を閉じたのである。

俊斎と長英

大槻俊斎

八つ半時（午前三時ごろ）、ぱっと上がった火の手は見る見るうちに江戸は小伝馬町あたりの夜空を紅に染めた。

一八四四年（弘化元年）、六月晦日のことである。

その直後、下谷の大槻俊斎（後の将軍家御典医）宅の玄関に姿を現した男がいた。やせて長身、青白い顔はひげにおおわれ、まとったろう服には縄のおびが無造作に締められていた。

「しばらくだったなあ、俊斎。」と、この男は玄関に出て来たこの家の主人に声をかけた。

俊斎は驚いた表情で、

「高野長英じゃないか。この時刻に何の用事があってこられた。」

「お前に助けてもらいに来た。」

「小伝馬町のろう屋が火事だと聞いたとき、君が現れるだろうと予感はしていたが……、まあ入れよ。」と俊斎は長英を促した。

二人は奥の書斎で対座した。

長英は、俊斎の妻やそが急いで用意をした茶づけ飯を流し込むようにがつがつと何杯か腹につめ込んだ。

「ところで君は、小伝馬町からどのようにして出てこられた。」

「柳原の土手続きからの出火で、あたり一面は火の海だ。『ろう屋は三日間の切り放し』とのおふれが御奉行からでたのさ。」

「三日間のご放免とのこと、ろう屋に戻れば刑が軽くなると聞いているがそうなんだろう。」と俊斎がたずねた。

「じゃなにか。ろう屋に戻って刑の軽くなるお情けを受けるのが身のためだ。

ろう破り覚悟の長英にこられるのは、まことに迷惑だから、早く立ち去ってくれと言うことだな。」

食べ終えた膳をさっと右側に移し、厳しい顔でどなりたてる長英に、俊斎はもの静かに話しかけた。

「君の心の底には、昔から悪い虫が住んでいる。何十年に一度有るか無いかの切り放しの機会を得ながら、このままろう屋に戻ることは、あまりにも世間なみで、とても君にはがまんのできないことだろう。君のこのような激しい気はくが、時には大きな飛躍をもたらした。わしは昔からその気性をうらやましく思うと同時に心配もしてきた。ところで、今ここで君はどのようにするのが良いかじっくりと考えてくれ。」

「わかったよ、わかったよ。だがお前の説教を聞きに来たのではない。せっかく腹におさまった飯のあと味が悪くなる。」

二人の間にしばしの沈黙が続いた。

俊斎の変わらない穏やかな口調で話が続いた。

「君はオランダの学問を学び、西洋医学を究めた科学者高野長英として世の尊敬を一身に集めた。その後それを捨てて社会制度の批評家、活動家に変身した。わしだって今の世の中に決して満足していない。新しい国づくりへのあこがれは君より強いかも知れない。しかし……」

語り続けようとする言葉を抑え、長英は語気を柔らげて、

「お前の言うようにこのおれは、昔からの風習や制度を改めさせ、世界に開かれた新しい日本をつくるために働きたいのだ。そのためには、わずかの時間も欲しい。ろう屋で過ごす日は、一日たりとも惜しくてならない。」

「長英、君が人のため世のためを思って活動する姿を見て、わしはいつも（おれは病人の医者だ、病人のためだけの医者だ）と自分の心に言い聞かせ、そう思い込むように努めてきた。君とわしとは同じ仙台藩の奥州人で年も同じ四十一歳。共に医学への道を求めてきた二人ではないか。今、江戸八百八町に猛威をふるっているコロリ（コレラ）や天然痘の流行を抑え、人々の尊い命を救うのは、わしらの使命ではないか。」

「ところで俊斎、話を変えるが、おまえのふるさと深谷（現矢本町赤井）は、冬になると雪の降る日が多いだろう。おれの水沢も雪国だ。そこには七十の坂をこえたおふくろが、わしの帰りを今か今かと待っている。一刻も早く帰って、おふくろを安心させてやりたい。こんな気持ちもいっぱいなのだ。」

苦しそうにゆがむ長英のほおに一筋の涙がこぼれた。長英がこのように嘆き悲しむ姿を目にしたのは俊斎にとって初めてのことであった。またも沈黙の時が流れた。

しばらくして、俊斎の念を入れるような力強い言葉がほとばしった。

「長英、繰り返して言うが、ろうには必ず期限内に戻られよ。医者として出直しをする機会は今しかない。そしてこのことは、君の母上への孝養にもつながることだ。このわしと手を取り合い、共に医者としての道を歩もうではないか。なあ、長英。」

切々の訴えをじっと聞いていた長英は、やがて静かに立ち上がった。

「君のわしを思う心は身にしみた。だが、自分の生きる道は自分で判断して決めるべきものと思う。考える時間を与えてくれ。

ところで飯はうまかった。あわせて礼を言うぞ。では俊斎、達者でな。」

悲しげに立ち去る長英の足音を、俊斎は静かに目をつむり、祈る心でいつまでも聞いていた。

世情騒然の中にも、新しい日本の夜明けがまさに訪れようとしていた。

大槻俊斎年譜（ねんぷ）

○一八〇四年（文化元年）桃生郡矢本町赤井に半農半士の次男として生まれる。

十八歳の時、医者になることを志し江戸に出る。三十四歳から四年間、長崎に留学し西洋医学を究め、江戸に戻り町医を開業する。一八四九年（嘉永二年）江戸に天然痘大流行、江戸で初めて牛痘種を行い多くの人命を救う。後にチフス患者の治療にも成功する。一八五四年（安政元年）蘭方外科医学書「銃創瑣言（じゅうそうさげん）」を訳し出版する。幕府、洋書の禁あるも出版を許可する。

○一八六〇年（万延元年）五十七歳、幕府御番医並びに種痘所（後、西洋医学所・現東京大学医学部前身）の頭取に任じられる。一八六二年（文久二年）江戸で没する。

高野長英年譜（ねんぷ）

○一八〇四年（文化元年）岩手県水沢に生まれる。一八二〇年（文政三年）江戸遊学。後長崎に出向し、オランダ人シーボルトに学ぶ。一八二八年（文政十一年）江戸で町医を開業し、かたわら蘭・英・仏・独語で医学・文化研究書を著す。

○一八三八年（天保九年）「夢物語」を草し、幕府の鎖国政策を批判したので渡辺華山らと投獄される。

一日も休まない図書館

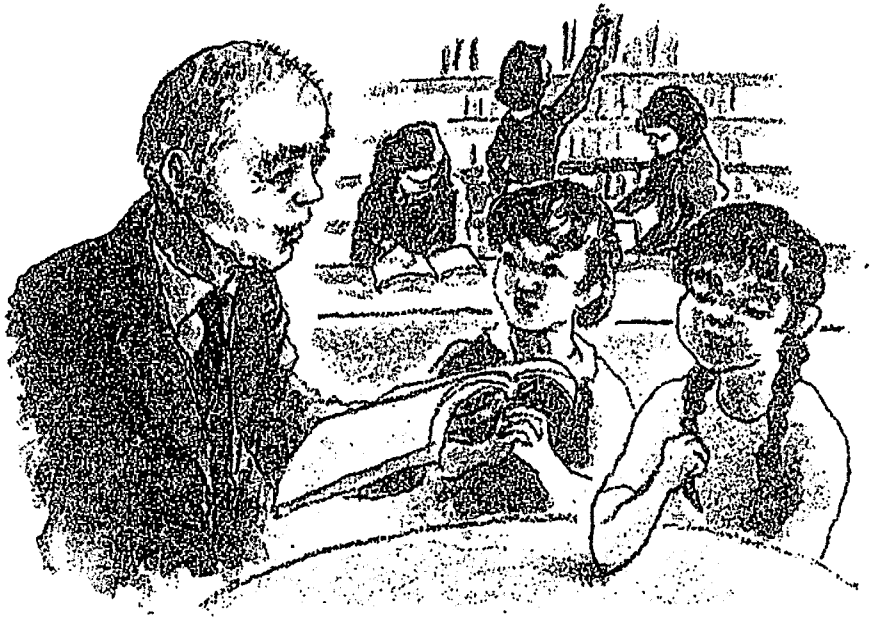
きょうは日ようび日なのに、子どもたちが朝から丸森町の金山図書館にあつまっています。館長の星先生は、にこにこしながら、ひとりひとりに

「おはよう。」

と声をかけます。子どもたちは、げんきに

「先生、おはようございます。」

とあいさつすると、本だなから読みたい本をさがし出して読みはじめます。先生は、なにを読もうかとまよっている子どもにか



おをよせて話をきき、

「うん、うん。」

とうなずいて本をさがしてやります。また、ときどき本を読んでかせたり、おもしろいお話をしてやります。

子どもたちは、やさしくてしんせつなこの館長先生が大すきでした。先生は使わずにためておいたおかねで本を買い、それを子どもたちがよろこんで読んでいるのを

みるのが何よりもたのしみでした。
館長先生は、この図書館に四十年ちかくもつとめ、八十才になってからも一日も休みませんでした。また、朝はやく、町の人たちがおきないうちにどうろのそうじをするなど、みんなのためになることはなんでもすすんでやり、町のひとびとからかんしゃされました。
金山から東京に出て、大きな会社をやっている人が館長先生の日ごろのおこないにかんしんして、
「どうぞ、先生のおすまいをたててください。」
といって、たくさんのおかねをおくったのですが館長先生は、それを受け取らないで、
「町の図書館をたてなおすおかねにつかってください。」
といってそっくり町にきふしました。それで、今のりっぱな図書館ができあがったのでした。
このやさしい館長先生が、ふとしたことからびょうきにかかり、それがよくならずにだんだんひどくなりました。町のひとびとは心からしんぱいし、はやくなおるように、といのりました。
しかし、みんなのねがいも、てあついかんびょうもかいがなくとうとうなくなってしまいました。みんなは、じぶんのおやをなくしたようになげきかなしみました。
そのあと、町のひとびとは、おかねを出し合って、金山こうみん館の前にわに、

「星泰三郎先生の像」

をたて、台の石に、館長先生をほめたたえる文をきざみました。

館長先生のうちの人たちが、心から子どもたちをかわいがった先生のきもちをおしはかり、たくさんの本と子どもたちが読む本をかうおかねを町にきふしました。図書館では、へやのひとすみに、その本をならべて、「星文庫」となまえをつけました。

子どもたちは、今もまいにち図書館にかよい、しずかに本を読んでいます。

堤人形の目にひかれて

芳賀佐五郎

あざやかな、土人形らしいあたたかみと、やさしい感じのする堤人形、これを長い間ひとりで守りつづけてきたのが、仙台市堤町の芳賀佐五郎です。

佐五郎は、堤人形作りの名人といわれた父、佐四郎に、十才のころから人形作りをおしえられました。

ある年、佐五郎は、自分のうでまえをみとめてもらおうと父にたのみ、人形を神社のおまつりにおさめてもらいました。そこでみとめられれば、人形作りとして一人前ということになるのです。佐五郎には、（りっぱにできたぞ）という自信がありました。

しかし、その佐五郎に、神社の神主さんから

「こんどからは、もう少しできのよい人形をたのみます。」

というもんくが出たのです。長い間たくさんの人形を見てきた神主さんには、佐五郎の人形が、きれいにはできていても、心のこもっていない、ただの土のかたまりのように思えたのです。

「あんなに時間をかけていっしょうけんめい作ったのに、土のかた

堤　人　形

まりだなんて……。どこがわるかったんだろう。ええい、こんな人形作りなんてやめてしまおう。」と佐五郎はくやしがり、夜もねむれない日がつづきました。

ある時、父の作った人形がふと目にはいりました。人形は、じっと自分の方を見ています。心にピンとひびくものがありました。そして、

「ここでやめてしまったら、堤人形を作る人はだれもいなくなってしまう。よし、人にわらわれない、みんなにかわいがってもらえる人形を作ろう。父さん以上の人形を作ろう。」

と心にちかったのです。

よい人形かどうかは、まずねん土で決まります。わるいねん土は、やいているうちにわれてしまうのです。そのため、よいねん土をさがして、遠くどこまでも出かけました。ねん土は百回、二百回と自分のこしが曲がらなくなるまでもみます。そうすることで、やっと人形にふさわしいねん土ができ上がるのです。

人形をやく時の火かげんもたいへんです。火を消さないように、何時間もまきをくべつづけなければなりません。少しでもなまければ、ざらざらしたはだの人形になってしまうのでした。

「人形作りにごまかしはきかない。自分の心がそのまま出てしまうんだ。」

そう思った佐五郎は、前よりもずっと心をこめて作りました。

仕上げは人形に目を入れることです。せっかくうまくできた人形も、さいごの目の入れ方でしっぱいし、（これはだめだ！人形の目が死んでいる）とたたきわることもたびたびでした。そのため、自分で気にいった人形を作り出すまでには何年もかかりました。でも、そんな佐五郎をいつもはげましてくれたのは、人形たちのやさしい目でした。

こうして佐五郎は、いつも心にかなった人形作りを心がけ、さらによりよいものを作ろうとがんばりました。その結果（けっか）、佐五郎は、父以上の堤人形作りの名人と言われるようにまでなり、堤人形は、全国の多くの人たちからよろこばれるようになりました。

ひびけ歌声　東北の地に

福井文彦が、東京の音楽学校に入って間もない、国語の時間のことである。

「つぎ、福井。読みなさい。」

（しまった。予習をしてこなかった。）

あわてて、森鷗外の名作「高瀬舟」の朗読を始めた。文彦は、しどろもどろながら読み進んだものの、そのうちに「数珠」という文字が目に入った。

とっさに、「人数」のズと「文珠」のジュを思い出した。

「ズジュ。」

とたんに級友のわれるようなわらいが教室の中に広がった。（あっ、しまった。「ジュズ」だ。）と思ったとたん、先生の声がかかった。

「福井、育ったところはどこだ。」

「はあ、仙台です。」

「ああ、道理で……。」

また、教室いっぱいにわらい声が広がった。

情けないやらくやしいやら……。しかし、東北弁を使っても、おたがいのやさしい心の通じ合いはできる。この時から、文彦は、ふるさとと音楽、ふるさとのことばを生かした美しいひびきについて考え続けるようになったのである。

東京の音楽学校で、ピアノや作曲の勉強をして仙台にもどった文彦は、大学の先生をつとめるかたわら、各地で合唱の指導をした。そして、仙台少年少女合唱隊をつくり、子供のための合唱曲を次々に発表した。

ことばを音ぷで表すと、どんな高さのどんなリズムがいちばんぴったりするのか、歌詞に表された気持ちを音で表現するには、どんな長さの音ぷにしてどんな音の組み合わせにしたらよいのか……。ことばと音と歌詞のもつ意味をメロディーとして表すために、文彦は、ピアノをひきながら何度も考え続けた。

「不思議ないずみ」「東北のおもちゃ歌」「海を渡った鹿」「地球よ」……

どれもこれも、人間、生き物、自然に対する深い思いやり、はげまし、愛情などを歌ったものばかりである。そして、東北の風土をふるさとのことば美しく表現した曲ばかりである。

「さあ、『こけしどこの子』の練習を始めましょう。」

曲を歌う前に、文彦は、どんな気持ちでこの曲を歌ったらよいのか、どこのことばを特に大事にあつかったらよいのかなど、子供たちにくわしく説明する。

「出だしの『こけぇーしぃー、どこのこぉー』は、目の前にあるこけしに呼びかけて、たずねるような気持ちで。」

静かに、やさしく文彦の手が動き出す。

「だめ、だめ。『こけぇーしぃー』のところは、まあるくふしを回すのです。こけしの頭はまるいんだよ。先生の頭みたいに。」と言って、つるりと頭をなでてみせるのであった。そのしぐさに、子供の表情がゆるみ、心が開いていく。実際に声を出してみせ、体を使い、子供にもわかるように説明しながら何度も同じところの練習がくり返される。

「『どこの子』は、どおこおのおこおと、終わりが全部おになるから、その前のどこのこをはっきりと声に出すように。」

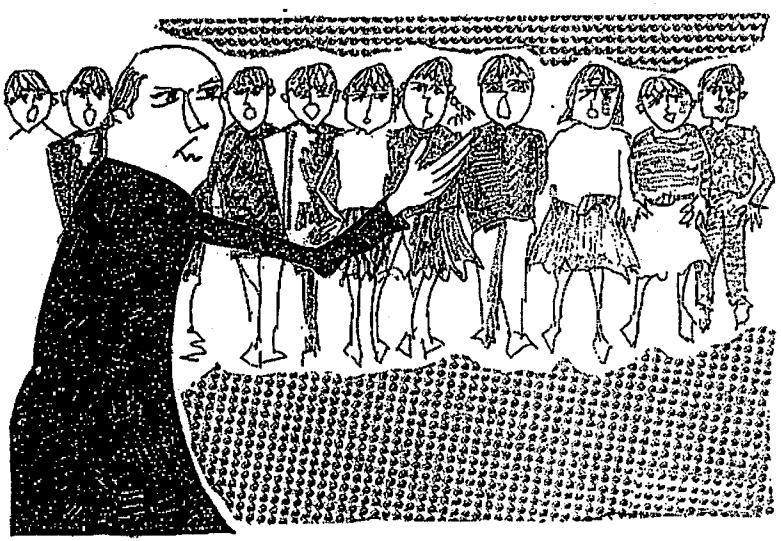
「今度はよくできた。二回めの『どこの子』

のところは、小さく、やさしく、そして、こけしにたずねるような気持ちで。」

時にははげしく、時には静かに、文彦の手がふられる。

「今のは何ですか。あれは音楽ですか。やる気がないのなら、もう練習はやめましょう。帰りなさい。」

文彦のいかりが爆発することが何度もあった。子供に対しておこっているのではない。子供の声を曲に合わせて、美しく引き出してやれない自分自身に対していかりをぶつけているのだ。そんな文彦のすがたを見ると、子供たちは、文彦が何を言おうとしているのかがわかるのであった。口を大きく開き、一つ一つの音をていねいに歌い、体の全部を使って表現しようとする子供たち……。文彦と子供の心が一つにとけ合い、そこから美しいハーモニーが生まれていった。



しかし、練習をはなれた時の文彦は、子供たちにとっては、温かい、やさしい、じょう談好きのおじいさんであった。文彦は、子供が大好きだった。

文彦が、山形県出身の詩人である真壁（まかべ）仁（じん）の「蔵王に寄（よ）す」を作曲したのは、一九五七年。それから十九年間、文彦はこの曲をオーケストラ、独唱者、合唱団、そして、文彦自身の指揮で演奏したいと願い続けていた。一九七六年五月十九日の演奏を間近にして、文彦は準備に走り回り、はげしい練習にあけくれていた。つかれはてていた。発表を直前にした五月十三日、とつぜん文彦は六十七才でこの世を去った。